

【肺の代表的な疾患】

企画・編集：梁川雅弘 大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座 放射線医学教室

序 説：初学者からベテランまで、思考を深める胸部読影実践ガイド

私たちを取り巻く医療環境は、AIを含めた技術革新とともに日々進化している。画像診断の分野でもその歩みは止まらず、迅速かつ正確な診断を求める臨床現場のニーズに応える新たな潮流が生まれてきた。本誌の好評企画である「読影のお作法—連続画像スライスで追う」シリーズは、画像診断の新しい流れを象徴する企画の1つである。

従来の画像診断雑誌が代表的なキー画像の提示に留まっていたのに対し、本誌ではQRコードを用いた連続画像の提示を導入している。これにより、静止画ではとらえきれなかった病変の微細な変化や周囲組織との連続性を把握できるようになる。情報量が飛躍的に向上するだけでなく、臨床現場さながらの読影スタイルで学べるため、より深い病態理解と診断につながると確信している。

こうした進歩は、経験豊富な専門医だけでなく、これから画像診断を学ぶ初学者にこそ恩恵をもたらすと考ええる。本誌では、読影の基本作法から診断の重要ポイントまで、丁寧に解説する記事を多数収録した。専門用語の解説に加え、正常解剖との比較、異常陰影のパターン認識、鑑別診断の思考過程まで、段階的に理解が深まるよう構成されており、まるで指導医が寄り添うように、初学者を力強く支える1冊といえるだろう。

今回のシリーズで取り扱うのは、臨床で頻繁に遭遇する胸部疾患である。肺炎や肺結核などの感染症、早期発見が求められる肺癌、診断が難しい間質性肺炎、呼吸不全の原因となる肺水腫、まれだが重要な鑑別対象となる肺嚢胞性疾患まで、日ごろ気になる胸部疾患を幅広く網羅した内容にした。

特筆すべきは、連続画像に精通したエキスパートの先生方に原稿を依頼させていただいた点である。連続画像を活用した読影法、陥りやすい落とし穴、診断精度を高めるポイントなどを豊富な症例とともにわかりやすく解説されており、「なぜそう読むのか」、「何が読み取れるのか」といった思考過程を明示することで、読影スキル向上に寄与する内容となっている。

本誌が、画像診断にかかわるすべての医療従事者にとって羅針盤のような存在となり、日々の臨床を力強く支える一助となることを心より願っている。

多岐にわたる胸部疾患に対し、貴重な知識と経験を惜しみなくご提供くださった執筆者の先生方に、この場を借りて心より深謝申し上げます。

「さあ、連続画像が拓く新たな画像診断の世界へ、私たちとともに踏み出しましょう!」

梁川雅弘